

施主と建築家のインタープレイによって創り上げた アートと生活を両立するための理想的な空間

光と風もコントロール
家族を身近に感じる家

今回ご登場いただくのは、美術家の横尾哲生さん・藤原ゆみさんとご夫妻。個々の創作活動のほか、横尾さんは埼玉大学教育学部の教授も務めており、藤原さんは病人や高齢者が生きる意欲を高め、社会とのつながりを回復する上での美術の必要性を追究しています。新居の建築にあたり、Beハウス千葉ニュータウン店の柴田恭司さんに依頼されました。

柴田●お二人はお母様と一緒に暮らせるよう、またお子さん方の教育環境も考えて、いままでのアトリエとは別に、自宅とミニアトリエを兼ねた家を作ることにされました。

横尾●仕事柄、1階ではミーティングや制作もできるように、生活機能は2階に置き、パブリックな空間とプライベートな空間を分けています。

藤原●光の方向や風の通り方を考慮しながら、間仕切りはなるべく少なく、吹き抜けによって全体がながって、家族の声と気配が感じられるように空間を配置しています。

横尾●毎日や季節ごとの雰囲気の変化と、20〜30年という大きな流れの中での生活の変化に応じて、空間を仕切ったり増減させたりして、変化させられる家を考えました。

柴田●今回のプランはそれらのご要望を、お二人のアイデアスケッチをもとに一緒に検討し、話し合いながら詰めていきました。

藤原●まず自分たちでアイデアを練り、スケッチを描いて柴田さんにイメージを伝え、それを実現させるための方法を具体的にいろいろご提案いただき、その中から気に入ったものをチョイスするという形で進めさせていただきました。



この家のためだけに描かれた二人のスケッチ

横尾●柴田さんには専門家として建築法規や工法・構造、性能やコストなどの面からアイデアを練り直していただき、それをまた私たちがスケッチに起こしたり、図面上で確認するというやりとりをしながら、実際の住宅に仕上げてもらいました。

柴田●ほかの住宅会社では、おそろくうは行かないと思います。

横尾●スケッチを見せて説明してもなかなか伝わらず、「うちではこういう図面を引いてみましたけど、こっちでどうですか」と、全く違うプランを提案されたりしましたね。

藤原●ですから私たちの考え方や好み、空間に求めるものなどを一つ一つ理解していただきながら、それを一緒に創り出される会社だと思って、Beハウスさんを選びました。

柴田●なるべくコストでというご要望もあり、本体は税抜きで1,800万円、外構を含めると2,300万円です。

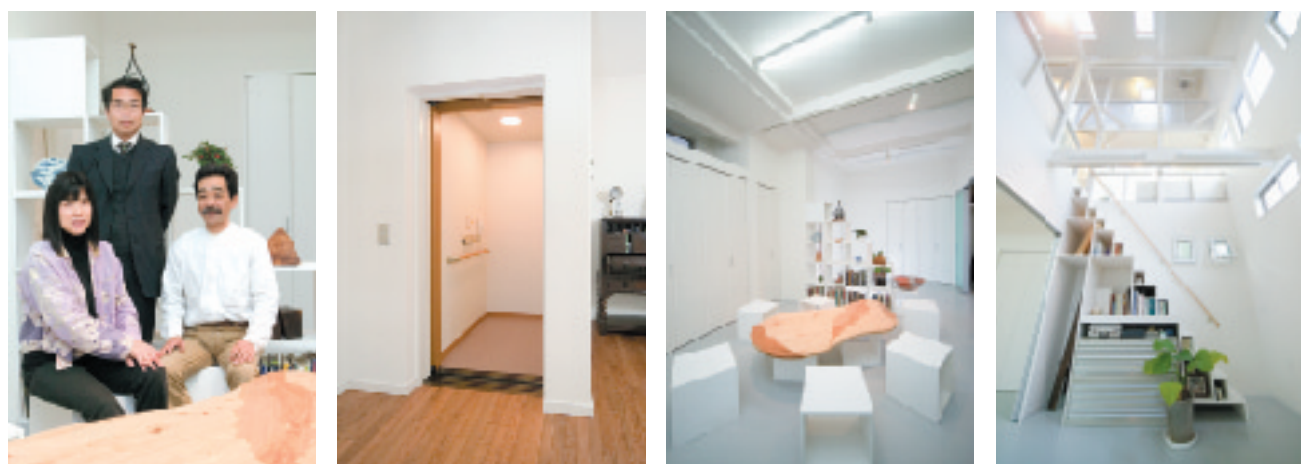
横尾●最初は、もともとここにあった古い住宅をリフォームしようかと考えましたが、問題点を解消しながら気に入るように改造していくと、かなり膨大なコストがかかってしまいます。それなら新築でも同じくらいの金額で建てられ、しかも、やりたいことを妥協せずに行けるという大きなメリットを享受することができました。(聞き手/池田充雄)



2階も壁面は白で統一。床は中国産材を米国で加工した無垢のオークです



約20帖のバルコニーから、全開口のパティオドアと広い廊下を通じ、リビングまで光と風を呼び込みます。パティオドアの横には牛久在住の家具作家、村上流太さんの製作したスツールも置かれていました



上段左より/横田さん・藤原さんご夫妻と、Beハウス千葉ニュータウン店の柴田所長/白やグレーという無彩色に囲まれたニュートラルな空間が、作品制作には最適。床は2種類のリノリウムを重ねてクッション性を持たせ、床暖房も入れています/お母様のため、3人乗りのホームエレベーター(165万円)も設置/アトリエの一角にある収納を兼ねた箱階段と、広い吹き抜け
右/外壁はフッ素塗装のガルバリウム。バルコニーを支える6枚の壁が適度に視線を切り、エッジの利いたデザインをもたらしました



Beハウス
—デザイナーとつくる家—
<http://www.behouse.jp/>

昨年12月、北総線・印西牧の原駅前にオープンした、Beハウス千葉ニュータウン店

